



さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和 6年10月31日 第8号

学校教育目標 心身ともに健やかで主体的に生きる子どもの育成

・たがいに努める子（やる気） ・たがいにきたえる子（元気） ・たがいに手をとる子（勇気）

言葉

井上 雅史

先日の運動会では、たくさんの皆様にご参観・応援いただきありがとうございました。児童もこれまでの練習の成果を存分に発揮し、思い出に残る運動会になったと思います。

さて、本校では、三つの基本（①あいさつ・返事 ②靴のかかとをそろえる ③チャイム着席）を継続して児童に指導しています。また、9月の生活目標には「自分から気持ち良くあいさつや返事をしよう」を設定し指導しました。他にも、宮原中学校と合同でのあいさつ運動や日々の授業や生活の中で、基本的なコミュニケーションの言葉について繰り返し指導しています。

しかし、100%の児童が明るく元気よく、あいさつや返事、感謝やお礼などのコミュニケーションの言葉を自然に言えるわけではありません。必要性を感じなかったり、言葉を発することが心のパワーを消費するしんどい行為と感じたりしている児童もいるはずです。

確かに、あいさつをしなくても日常には大きな変化や困ったことは起きません。しかし、たった一言発するだけで避けられたはずの悪い印象を相手にもたれてしまうかもしれません。子どものうちはまだよいかもしれませんが、そのまま社会人になってしまうとデメリットが大きいと思います。人間関係論の先駆者であり自己啓発の父とも言われるデール・カーネギーは「人に好感を持たれたければ、誰に対してもあいさつをすることだ。あいさつほど簡単でたやすいコミュニケーション方法はない。」という言葉を残しています。将来の社会人として幸せに生きるために、全ての児童があいさつのようなコミュニケーションの言葉を必要な時に自然に伝えることができる人になってほしいと願っています。

また、コミュニケーションの言葉には人とのコミュニケーションを良好にするだけでなく、自己肯定感を上げるという効果もあります。「おはようございます」とあいさつをしたとき、相手から「おはよう」と返されるなど相手からの返答は、自分が認識され、存在が尊重されていると感じ、そのことが自信につながります。私もこのことは実感しています。私は朝の通学路や校舎内で児童に自分からあいさつの声をかけますが、実は毎回少しドキドキしています。なので、笑顔で「おはようございます」と返してもらったときは本当にうれしい気持ちになりますし、安心します。

コミュニケーションの言葉はどれも短い言葉ですが、言った人、言われた人、両方の心と人生を豊かにする力をもった言葉だと言ってもよいのではないのでしょうか。

一方、できるだけ使わないようにした方がよいという「二大タブー語」というものがあります。それは「どうせ」と「やっぱり」です。この言葉をよく使うと、人は自信を失い自己嫌悪に陥り逃避型の考え方をするようになるそうです。

心理学者で千葉大名誉教授だった多湖輝氏によると「ふだんなにげなく使っている言葉が、大きな自己暗示力を持っていて、プラスにもマイナスにも働くことがよくあります。もしあなたが無用の劣等感に取りつかれているとしたならば、「どうせ」「やっぱり」の二大タブー語をあなたの会話や文章から消し去ってください。それだけでも人生が変わり、自信がモリモリ湧いてくることになります。」とその著書『まず動く』の中で述べています。

言葉は記号や音声で意味を伝えるだけでなく、人の心と行動を変化させる力をもっています。私もできるだけポジティブな言葉を選んで使うよう心掛け、豊かな言語環境を整えるよう努力していくとともに、児童にもコミュニケーションの言葉の大切さを伝え続けていかなければと思っています。